

2024 年度日本農業史学会・学会賞候補業績募集および

2025 年研究報告会(個別報告募集)のお知らせ

会員各位

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。日本農業史学会より標記の件について、以下の通りお知らせします。

(I) 2024 年度日本農業史学会賞（学会賞・奨励賞）候補業績の募集

以下の通り、2024 年度日本農業史学会賞（学会賞・奨励賞）候補業績を募集いたします。

【学会賞】 (1) 対象者：優れた研究業績を公刊した 40 歳以下の会員（研究業績刊行時点）

(2) 対象業績：過去 2 年間（2023 年 1 月～2024 年 12 月）に公刊された著書およびそれに準ずるもの

【奨励賞】 (1) 対象者：将来の発展が期待される研究業績を公刊した 40 歳以下の会員（研究業績刊行時点）

(2) 対象論文：過去 2 年間（2023 年 1 月～2024 年 12 月）に公刊された論文およびそれに準ずるもの。

【応募方法】: 本会会員の推薦によります(著者自ら推薦することを妨げない)。推薦に当たっては、所定の推薦書を付してください。一度対象となった業績の再応募は認められませんが、同一人物でも別の業績であれば差し支えありません。

推薦書および対象となる業績（著書の場合 1 部、論文の場合 5 部（コピーでも可））を事務局までご送付下さい。締切りは、2025 年 1 月 31 日といたします。

「推薦書書式」は、学会HP（学会規約→日本農業史学会賞表彰規程細則→「別添書式（学会賞推薦書）」または「別添書式（奨励賞推薦書）」）からダウンロードしてください。

<http://agrarian-history.sakura.ne.jp/institution.html>

学会賞推薦書：<http://agrarian-history.sakura.ne.jp/doc/suisenshosiki1.doc>

奨励賞推薦書：<http://agrarian-history.sakura.ne.jp/doc/suisenshosiki2.doc>

なお、学会賞と奨励賞はそれぞれ別の書式を使用することになります。ご注意ください。

(II) 2025 年日本農業史学会研究報告会に関するお知らせ

2025 年の日本農業史学会大会は対面方式にて行います（ただし午後からの大会シンポジウムは Zoom にて中継する方向で検討しています）。また懇親会の開催を予定しています。

研究報告会のプログラムや会場案内は、2 月上旬にお知らせする予定です。

記

日時：2025 年 3 月 28 日（金） 午前：個別報告／午後：大会シンポジウム

会場：日本大学・湘南キャンパス（生物資源科学部 10 号館 演習室 1・演習室 2／第 4 講義室）

①個別報告の募集について

個別報告をご希望の方は、下記要領にて電子メール(ないし郵便)で学会事務局までお申し込みください。

1) 必要書類：申込用紙（氏名、所属、報告タイトル、連絡先、メールアドレス）

および**報告要旨（1,000字以内）**。書式は任意です。

2) 申込期間：2024年12月24日（火）～**2025年1月31日（金）**。

3) 申込先：学会事務局まで。

メールの場合：office@agrarian-history.sakura.ne.jp

郵送の場合：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学農学研究科生物資源経済学専攻比較農史学分野気付

日本農業史学会事務局まで

なお、報告時間は最長で50分（報告40分、質疑応答10分）を予定しています（ただし報告者数が多い場合には短縮されることがあります。あらかじめご了承ください）。

会員各位の積極的な応募を期待しております。大会プログラムは2月上旬にメールにて改めてご案内する予定です。

②2025年日本農業史学会シンポジウム

農業生産のジェンダー史

オルガナイザー：岩島史（京都大学）

【趣旨説明】

人文学・社会科学にジェンダーの視点が導入されるようになって久しい。農業史研究においてもジェンダーの視点を取り入れた分析が見られるが、その多くは農業・農村の「女性」とこれまで女性という性に結び付けられてきた家族や生活、消費といった問題領域に焦点をあててきた。しかしこのようなアプローチは女性の役割に関するステレオタイプを強化しながら、ジェンダー分析をゲットー化してしまうおそれもある。

本シンポジウムでは、農業史においてながらく中心的な論点であった農業生産の領域を、「女性」史ではなく「ジェンダー史」として議論したい。農業生産に携わる人々にとって、「女性であること」や「男性であること」はどのように経験されたのか。そこにはどのような矛盾や差異があったのか。植民地権力の下での社会的位置づけ、世代、家族構成、雇用労働力の地域内および農家経営内における組み込まれ方などによって、その歴史的意味も異なるだろう。農業生産に不可欠な資源である農地、農業労働力、農業技術に焦点をあてた3本の報告を通して、近現代東アジアの農業史をジェンダーの視点から問い直すことを試みる。

【報告者とコメンテーター】 (報告タイトルはいずれも仮題です)

趣旨解題：岩島史（京都大学）

報告者：小谷稔（東京大学）「植民地朝鮮「農村男子青年」のポリティクスとジレンマ
—1930年代の農業生産と戦時動員、その表象をめぐって—」

五十嵐英梨香（一橋大学）「戦没者世帯における農家経営：農地改革と小作地引き上げ」

飯田悠哉（愛媛大学）「標高 1300m の労働争議：戦後高冷地季節雇の抵抗とジェンダー化」

コメント：小島庸平（東京大学）

都留俊太郎（中央研究院台湾史研究所）

司 会： 藤原辰史（京都大学）

③懇親会

研究報告会終了後、生物資源科学部本館のカフェテリア「オリビア」にて懇親会を開催する予定です。

(Ⅲ) その他

会場確保の関係から、今回の研究報告会は農業問題研究学会との共催になります。

日本農業史学会事務局

office@agrarian-history.sakura.ne.jp

郵便振替口座 00180-9-20117

(連絡先) 〒606-8502 :

京都大学農学研究科生物資源経済学専攻

比較農史学分野気付

Tel : 075-753-6185(伊藤)、Fax 075-753-6191